

〔政経研究所シンポジウム報告要旨〕

東アジアと日本政治

——日本と韓国（韓国と日本）の地域間交流を中心にして——

報告者 日本大学法学部

佐 渡 友

山 田 光

哲

韓国・靈山大学校

孔

義

植

（日本大学法学部政経研究所研究員）

一. はじめに

本報告は、三年計画で実施している研究所の共同研究、「東アジアと日本政治」の調査研究の内容の一部である。本研究の目的の中心は、現在日本では国境地域における島の領有権が問題となっているが、当該国境地域においては、「地域交流圏」といったものの形成を模索しながら、活発な地域交流が展開されている。

東アジアと日本政治（佐渡友・山田・孔・崔）

本研究では現在、沖縄県や石垣市・与那国町と台湾の周辺地域および中国、福岡県や福岡市、長崎県および対馬市を中心とする長崎の県内市町村と韓国および釜山広域市と区あるいは周辺市町村、島根県と県内市町村などを対象として、国境圏の交流の実態を考察している。今回は、もっとも調査研究が進んでいる日本と韓国の地域間交流の実態を中心に、各研究者が主題としている項目について報告し、相互のディスカッションを通じてその内容をより明確にしていく所存である。

報告の中心は、福岡市や対馬市と釜山広域市と島影区およびその蔚山市蔚州郡の交流の歴史や実態や将来などに関するものである。最初に「両国の地理」や「日本と韓国を中心とした東アジアの地域間交流の歴史や現状」などを論じ、その枠組みの中での、釜山広域市と福岡市の交流の実態、そして釜山広域市や島影区あるいは蔚山市蔚州郡などと対馬市との交流の実態を中心に報告する。

二．国境地域を考える視点

日中、日韓の関係は現在、「政冷経涼」にあり、日中韓三国の首脳会談は二〇一二年五月を最後に途絶えていて、日中、日韓それぞれの首脳会談も実現できていない。北東アジアに見られるこのような状況は、欧州、東南アジア、北米にもない奇妙な現象であるといえる。しかし日中韓の関係を政府間や政治地図からではなく、広く多様なヒト、団体、モノ、情報の交流の輪を視点に再構築すると、違った関係が見えてくる。

第一に、国境を超える地域間交流の視点である。冷戦終結後の一九九〇年代から、日本海側の諸都市の自治体、経済界、大学、シンクタンクなどが中国、韓国そしてロシアの都市との新しい交流の時代に入ったという見方である。

第二に、国境を超える人の往来、貿易や経済交流の進展が、やがて政府間のFTA、首脳外交にまで発展するという機能主義の仮説である。欧州に見られるように、石炭鉄鋼の共同管理から市場統合、通貨統合、政治統合へとそれぞれの機能が積み上げられて最終的に地域統合が完成する、という仮説を適用したものである。今日の北東アジアの研究者からは、この理論的枠組みは否定される傾向にあるが、はたしてその検証はどうなっているのだろうか。

第三に、日本周辺の国境地帯で人々が新しい地域交流圏を形成しているという仮説である。例えば人口約三万四千人の対馬には年間その五倍以上の韓国人観光客が釜山から国際定期船で訪れる。日韓関係の歴史資源と魅力的な自然資源のあるこの島は、韓国から最も安価に行ける最も近い外国である。日本の二五の空港から韓国へ定期便が運航され、年間二五〇万人以上の渡航者が出かけ、韓国からもほぼ同人数がやってくる。釜山港の巨大なコンテナヤードの取扱量は、東京港と横浜港を合わせた量の約二倍を誇り、日本の五七の港から週六一便が到着する。まさに日本海物流のハブ港である。

政府間関係やメディア報道から形成された「想像の日中韓関係」とは違った日中韓の実像を検討し、「政暖経熱人知」の新しい関係を考えてみたい。(佐渡友)

三. 釜山広域市と福岡市の地域間交流

中央政府間の外交関係が行き詰っている中、釜山と福岡の間における地方自治レベルと民間レベルでの交流は着実に進められている。何よりも地理的隣接性と経済的メリットのため、地域間交流の伝統を維持しており、数え切れないほど多様な行事と構想がニュースで一般に知られている。最近になって観光客などの一時的訪問者の数は減ってい

るものの、一九九〇年から両市間に公務員の相互派遣は相変わらず続いており、二〇〇八年からは「超広域経済圏 mega-regional economic area」構想の実現に向け経済協力協議会が設けられ活動している。また両市の間には、企業間のビジネス交流のみならず市民団体や大学による民間交流も盛んに行われている。本発表では、両市間の交流の現況を最近の統計に基づき総体的に把握するとともに、地域間交流の現況を具体的な実例をもって紹介したい。

第一に、両市の経済的交流の統計とインターネット発信の実態を紹介する。まず、両市の公式統計から、観光客・外国人登録・船と飛行機の定期便・行政協定などによる人的交流の現況を把握するとともに、地域間貿易・投資・企業進出などによる物的交流の現況を把握する。また、二〇一〇年七月から釜山市によって毎月日本語で発信されている「ダイナミック釜山 Dynamic Busan」と、二〇一三年一月から福岡市によって毎週韓国語で発信されている「福岡市メールマガジン Fukuoka Mail Magazine」の記事から、ユニークな便りを取り上げ紹介する。

第二に、釜山韓日文化交流協会を事例に、釜山からの市民団体レベルでの交流を紹介する。同協会は一九八七年一月結成されて以来、福岡市との青少年交流・「ASIAN FRIEND」の発行・文化行事の共催など、多彩な民間交流をリードしている。今年日本大学法学部の研究グループも同協会を一度訪問したことがあるが、本発表者は再び同協会を訪れるとともに役員とのインタビューを行い、釜山と福岡との民間交流の現況と問題点について聞き取りを実施してみたい。

第三に、霊山大学のフィールド学期プログラムを事例に、大学レベルでの交流を紹介する。発表者の所属大学は、日本語を学んでいる学生を主な対象にして、二〇一三年春から二ヶ月間福岡に滞在させ、授業の一環として市場調査と民間交流とを推し進めている。学内の学生からの反響もよく、教育の効果も優れている。時折、発表者が今年四月

から六月まで、引率教授としてこのプログラムに携わった経験もあり、青少年の国際交流の意義や限界について経験談として発表したい。(崔)

四、釜山広域市及び周辺地域と対馬市の交流

対馬と釜山との距離は四九・五kmに過ぎなく、「魏志倭人伝」にも記載されているように、古代から頻繁な交流が行われていた。両国の交流発展のきっかけは、一三七五年の室町將軍足利義満からの使者と国書に対する返礼として、朝鮮から信を通す使者とが派遣されたことにある。これが通信使の始まりである。

その後、一三世紀から一六世紀の「倭寇」対策のため、世宗大王の親任を受け、四〇数回にわたって日本各地を訪れた、蔚山郡の役人であった李藝の活躍がある。二〇〇五年に韓国政府は李藝を「文化人物」に選定、対馬市も市内円通寺に「通信使李藝功績碑」を建立している。さらに韓国政府は二〇一〇年に李藝を「外交人物」に選定しその功績をたたえている。

韓日交易の拠点となったところが、朝鮮王朝が認めた三つの寄港地、すなわち東萊県富山浦と金海府乃而浦と蔚山の塩浦のいわゆる三浦である。そこに日本人が居住することによって和館がつくられてきたのである。和館はその後ソウルにも作られた。三浦の乱で三浦の和館は一時廃止されたが、その後現在の釜山広域市の中に豆毛浦和館と草梁和館が作られた。

豊臣秀吉による韓国侵略の結果、国交断絶となり通信使はとだえしたが、一六〇七年に再開されて一八一一年まで継続された。この際、対馬藩の韓国の窓口として釜山に「和館」がおかれ、韓日交易が継続されてきた。一九八三年に

姉妹縁組結縁を締結した対馬市と釜山市影島区はこうした地理的な条件を活かして、行政交流ゼミナール、職員の間
互交換研修を行っており、官・産・学の国際交流協定を結んでいる。

対馬市は影島区との交流を過疎化が進む中、停滞しつつある経済の活性化に繋げる目的で積極的に取り組んでいる。
対馬市が市のPRと日韓交流の拠点として「対馬釜山事務所」を運営しているのはこうした事情をよく物語っている。
一方、影島区は対馬との交流による経済的なメリットが期待できないことから人的交流やイベントの開催などに留まっ
ている。最近の動きとしては二〇一二年に起きた仏像盗難事件により交流に障害が生じたものの、両自治体の協力下
で日韓の「朝鮮通信使ユネスコ世界記憶遺産共同登録」が推進されるなど、交流と協力関係は深まっている。

今後の課題としては、両自治体の関係を単なる「交流関係」から多様な利害関係が絡み合う「協力関係」に発展さ
せ、日韓の葛藤を各方面から牽制するシステムを構築するかである。こうした点をとくに韓国側の視点から分析して
いく。(孔)

五. 対馬市の地域おこしと釜山広域市等との地域間交流

最初に対馬の韓国との歴史的な関係を見ていく。対馬の経済は朝鮮王朝との交易にかなり依存していた。そうした
両地域の交流の歴史や朝鮮通信使と対馬の関係から事実を確認していく。特に江戸時代の朝鮮通信使復活や、その継
続に向けた対馬藩の暗躍を、『最後の朝鮮通信使来日二〇〇周年記念事業報告書』や、辻原登著『韃靼の馬』なども
加え、釜山の「和館」の存在から、日本の鎖国の実態や両地域の交流の特徴を分析していく。

次に現在の対馬市と釜山広域市の交流を、両国の地方自治制度の改革や、とくに対馬市の資料や実情分析なども含

めて考えていく。われわれが調査のために対馬に出かけた経路も成田から釜山経由で船舶を利用して対馬に入った。このほうが便利なのである。こうした韓国からの観光客への依存度の高さやその将来に向けた可能性を分析していく。さらに対馬の特産品をいかにして韓国に輸出するかといった経済戦略にも触れてみたい。

特に経済発展が著しくメトロポリタン化する新しい都市建設にまい進する釜山広域市の現状と、少子化と過疎化に悩む対馬の韓国との経済交流にける期待やなどを軸に、現状分析を中心に報告する。とくに韓国人観光客への期待度の高さと、異文化交流に付随する混乱、あるいは学術や文化を通じた相互交流の実態などを、特に対馬の視点から分析していく。そこにおける長崎県の対応についても若干触れてみたい。

最後に、今後の対馬市の、日本各地と釜山までの韓国各地を結びつけた、「朝鮮通信使文化の世界遺産登録」も踏まえた広域観光圏形成戦略についても触れることで、日韓関係の今後について、対馬市と釜山広域市だけではなく、韓国と日本を一つにつないだ広域観光圏の形成に朝鮮通信使の歴史がどのような役割を果たすことができるかといったことも合わせて考えていく。(山田)

六. おわりに

それぞれの報告を前提としたディスカッションを行い、報告の内容をまとめる。その後会場からの質問に答えて報告をまとめる。

「追記」 なお実際の報告は「序にかえて」でもおことわりしたように、「政経研究所のシンポジウム」では第一部の二(山田)、三(佐渡友)、三(催)、四(孔)の順序で行った。